

風車

紀州の歴史と文化の風

文化財センター季刊情報誌【かざぐるま】

2020 春号

90

公益財団法人 和歌山県文化財センター



特集 景観重要建造物

大福院本堂の保存修理

— 建物の復原考察とその過程について —



大福院本堂竣工（上：正面外観、左：内部内外障境）
虹梁・木鼻絵様（右）

特集 景観重要建造物大福院本堂の保存修理

— 建物の復原考察とその過程について —

田辺市の景観まちづくりと大福院本堂の修理

田辺市は、豊かな自然、城下町の風情残る市街地などの田辺らしい景観を守り、創り、次代に継承するために平成二九年三月景観計画を施行しました。国土交通省は「景観まちづくり刷新支援事業」として全国で一〇地区の「景観まちづくり刷新モデル地区」を指定して景観の面的な整備を支援しました。田辺市はその一つに指定され、平成二九年度からの三年間で集中的に事業を実施し、鬮雞神社周辺、JR紀伊田辺駅前などで景観資源を活かしたまちづくりを進めています。

「鬮雞神社周辺の景観整備」の一環として、平成二九年七月に景観重要建造物第一号に指定された大福院本堂を文化財に準じた方法で保存修理を行いました。平成二九年度は、建物の調査を行い、現状図面と復原図を作成し、基本設計を行いました。平成三〇年一月月から修理工事に着手、令和二年二月に工事は終了しました。



図1 田辺市の景観まちづくり刷新事業（ホームページから転載）

大福院は熊野別当湛増たんぞうによって開かれたといわれています。天正一三年（一五八五）の兵火で鬮雞神社とともに焼亡しました。寺蔵の寛永七年（一六三〇）の「新熊野権現宮願坊極楽寺」が今の位置に描かれています。

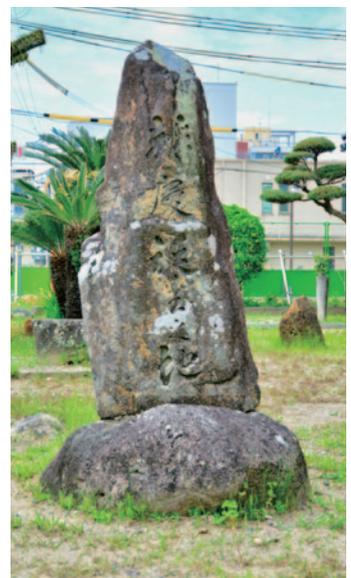


写真1 弁慶誕生之地の碑

一九世紀民慶の時に三宝院の末寺となりましたが、現在は小院として形を残すだけになっています。なお、武藏坊弁慶は湛増の子であると伝えられており、境内には「弁慶誕生之地」碑が建てられています。

本堂は小規模な寄棟造本瓦葺きの三間堂で、正面に一間の向拝を付けています。建立年代は向拝の虹梁や木鼻の絵様から一七世紀後期と考えられます。向拝の虹梁と木鼻以外に装飾的部材は一切ない簡素な堂です。もとはありまじ蟻通神社の薬師堂で、大正四・五年頃に移築されたと伝えられています。



写真2 大福院境内全景

建物の破損とその原因

南面して建つ本堂は西に大きく傾き、鉄骨で支えられていました。取り替えられていた向拝の柱と身舎の柱筋がずれていることから、かなり昔から建物が傾いていたと考えられます。礎石の不同沈下を疑いましたが、礎石の寸法は深さ方向に約四〇センチあり、基礎は安定していて大きな沈下は見られません。

屋根瓦にずれが見られ、ずれによる雨漏りで、野地や小屋組に腐朽が見られました。柱や桁・梁などでは雨漏りや経年による破損のほか、シロアリの被害による破損が見られました。南東隅では柱の折損、床の陥没が見られました。

以上により建物が西に大きく傾いていたのは、木部の損傷が原因と判断しました。

建物の復原

大福院本堂は今回の修理によって、大きく姿を変えました。内部は板壁、板床、内外陣を結界で仕切るなど閉鎖的な密教や修験の仏堂の趣を持つ建物となりました。建物がこの姿になるまで何を見て何をどう考えていたか、を紹介したいと思います。

通常の文化財の修理では全て解体し終わってから復原案を検討しますが、予算獲得と改変の状況を考慮し、復原案を修理前に作成し

ました(図3)。素屋根を架け、屋根瓦と土壁を解体した時点で柱などの痕跡をもう一度調査し、作成した復原案を再検討しました(図4)。それに基づいて建物を組み上げました。この本堂は、以前から移築時に背面軒下を張り出して仏壇とするなどの大きな改造があったことは知られていました。

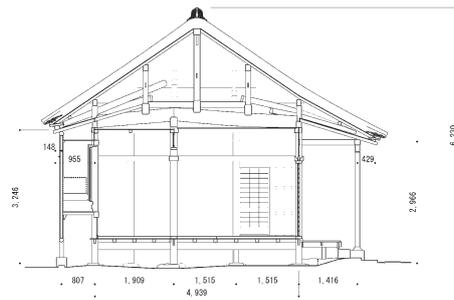
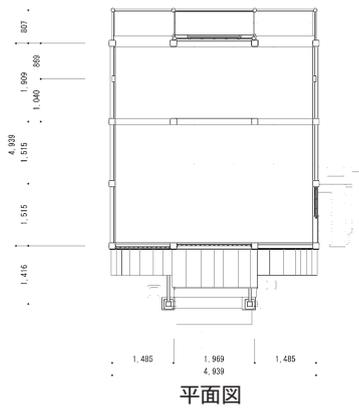


写真3 修理前の大福院本堂 正面外観

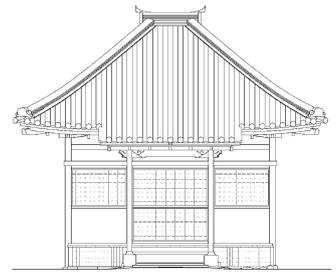
修理前の調査による復原案(図3)は、以下のとおりとなりました。①昔から言われているとおり、後方に移されていた仏壇を半間手前の元の位置に戻しました。薄板が貼られ隠されていた柱の痕跡から造り付けの厨子を設けました。②内外陣境の内法長押を引き通し、長押の上を板壁に復旧しました。中央間は上下二分割のはめ殺しの建具、両脇間は腰の高さの板壁が入ります。ただし、この時点

では外陣と内陣の間を行き来できないので中央間の建具の設置は保留しました。

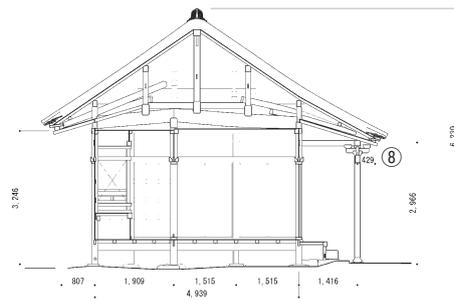
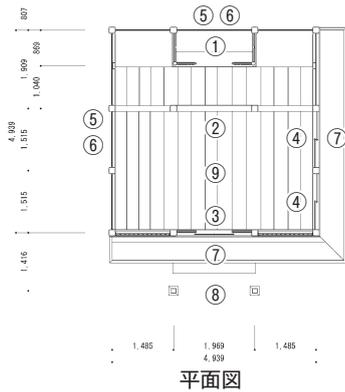
外回りでは、③正面中央間は残っていた三本溝の敷鴨居に引き分けの板戸と内側に明かり障子を入れました。両脇間の建具は現状のまま土壁を板壁にしました。④東側面は、南から一間目と二間目に二本溝の襖用の鴨居が残され、柱には東側に建物が取り付いていた痕跡があったので、部屋境の間仕切りとして襖を想定しました。修理後は外部に面するので板戸に襖の本紙を貼った戸襖に整備しました。⑤西面と背面は痕跡から土壁を板壁に変更しました。⑥柱側面や足固貫の風蝕から、壁板は床の高さまでで、床下は開放です。⑦正面と東面の足固貫には根太が取り付いた痕跡があり、正面と東面に縁が付きません。⑧向拝回りでは水引虹梁と桁が密着していません(表紙右下写真参照)。あまり見かけない納まりなので柱を取り替えたときに三斗組が撤去されコンクリートで嵩上げされていると考え、礎盤を下げて三斗組を入れました。⑨床と天井ですが、畳の下にきれいに仕上げられた床板が残されており、拭板敷きであることがわかりました。天井は内外陣とも棹縁天井で、外陣の天井板を除いて元のまま古いものが使われていました。⑩小屋組、軒廻りや軸組などに大きな変更はありませんでした。



桁行断面図
図2 修理前実測図



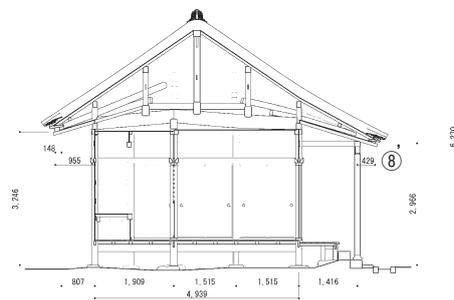
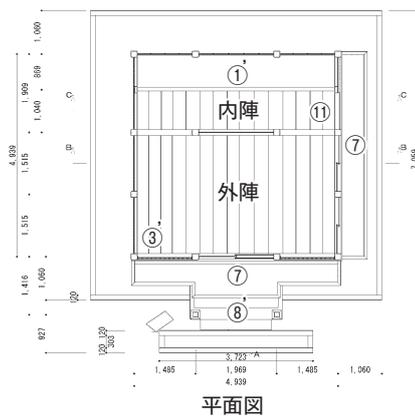
正面立面図



桁行断面図
図3 解体前復原案



正面立面図



桁行断面図
図4 竣工図



正面立面図

※図面と本文中の丸囲み数字は対応いたします。

この他、薄板によって隠されていた仏壇廻りの柱の解体番付は、柱の表面を削って書かれており、移築前から仏壇を後方に移す計画であったことがわかります。また、背面柱の土壁の当たりは当初はなく、移築前にも改造があったこともわかりました。

工事が進み、柱や桁など軸組があらわになったときに追加調査を行い、修理前に作成した復原案を再検討しました(図4)。調査の結果、四カ所を修正することとなりました。

① 仏壇の厨子は、高欄や框の仕口が、左右の柱で異なり、修理前の厨子に明治二五年の墨書があったことなどからも、当初はなかったと考え、造り付けの厨子を設けないことにしました。③ 正面両脇間の下部には壁の痕跡がないため、半葎としました。⑧ 虹梁と桁は当初から密着していたことや、礎盤・石階段の位置・高さも元のままであることがわかりましたので、三斗組が入らない修理前の姿です。⑩ 内陣の東面は板壁でなく片引き戸が入ることがわかりました。これにより内外陣境を結界で仕切っても内陣に出入りできるので、②で保留した中央間に上下二分割のはめ殺しの建具を復原整備しました。

縁は⑦の痕跡からは樽縁(壁面と平行に板を張る縁)であることはわかりますが、縁の出・縁框や縁葛などの寸法がなかなか決まりませんでした。その幅や長さは、東側に建物



写真4 修理前の内陣東面（仏壇の痕跡）



写真5 竣工の内陣東面



写真6 修理前の内陣・外陣境



写真7 竣工の内陣・外陣境



写真8 修理前の正側面外観



写真9 竣工の正側面外観

が取り付いていたことを考慮し、軒の出や他の部材の寸法を参考にして整備しました。

今回の修理は、田辺市の景観事業として実施されました。そのため、闘雞神社前の景観を整えるという目的に重点が置かれていましたが、田辺市教育委員会はこれを機に建物の価値を高められればということになりました。修理前の姿より、当初の姿が価値が高いであろうという判断の下、田辺市教育委員会の担当者と協議をもち、施工者の意見も参考に決定しました。しかし、最後まで悩み続けたのは、現位置にこのような姿の堂は建っていないなかったということです。修理前の姿は、信仰の形態の変更に合わせて改造されたものです。

移築された建物の修理では建物と土地の歴史を考慮して、移築された時点での姿に復原整備することがあります。建物の復原にはいろいろな答えがありますが、今回は以上の経緯から蟻通神社境内にあった当初の姿に復原整備しました。

引き続き、本堂東側にある地藏堂・山門・行者堂及び鎮守堂の修理が行われています。田辺駅前商店街のアーケード撤去や建造物の外観修景などの「駅前空間の景観刷新」、参道の舗装の美化、ポケットパークの整備などの「闘雞神社周辺の景観整備」などは五月末には完了します。

（寺本 就一）



天路山城跡の発掘調査

てんじやまじょうあと

天路山城跡は、和歌山県日高郡日高町比井、津久野にまたがって所在する中世の山城跡で、別名「比井城」とも呼ばれています。標高約七〇mの山頂にある主郭を中心に、南北の尾根上に階段状に曲輪が配置された大規模な山城であり、築城したのは室町幕府の奉公衆で、中世から戦国時代の日高地方で勢力を誇った湯河氏とされています。城主については諸説ありますが、城跡の東に位置する比井若一王子神社に弘春社が存在することや、比井浦の沿革が記載された『古今年代記』の記載から、湯河氏の本城である亀山城最後の城主、湯河直春の従弟にあたる湯河弘春であったと考えられます。

今回、当文化財センターでは、道路工事に伴い、記録保存が必要な範囲について令和元年十月から十二月まで発掘調査を行いました。発掘調査を行った場所は、山頂にある主郭と地元で「土居」と呼称される南

側山裾部分の平坦面とのほぼ中央に位置する場所で、和歌山城郭調査研究会の踏査では曲輪の可能性が指摘されていました。発掘調査では、曲輪に関連した櫓や建物の柱穴などの痕跡は確認できませんでしたが、岩盤を削り、盛土によって平坦面を確保していることが判明しました。岩盤を整形した詳細な時期については、出土遺物が乏しく、不明ですが、天路山城築城時までさかのぼる可能性があります。また現在、調査区から南北に延びる境界土塁は、単なる盛土ではなく、元々は岩盤を削り出して土塁状に整形していること、また、それが「土居」からほぼ途切れることなく続いていることが明らかになりました。平時における生活空間である「土居」から山頂の主郭への通路として使用された可能性が考えられます。

主郭の存在する山頂から紀伊水道を一望できることから、戦国時代には、湯河氏が眼下の海上交通における要所を押さえ、紀伊水道を往来する船を監視する役割も担っ

ていたと推測でき、天路山城は湯河氏にとって重要な拠点の一つであったと考えられます。また、天路山城跡周辺には、湯河氏に関連するとみられる五輪塔や伝承が複数残ることから、戦国領主湯河氏の残り香が今も感じられます。

(濱崎 範子)



山頂から調査地及び比井漁港を望む（北から）

瓦のはなし ④ 棟飾り―進化の過程―

私が瓦に興味を持ち始めた頃、和歌山市梶取に所在する県指定文化財総持寺総門の修理工事が始まりました。その時、棟積みの側面に嵌め込まれている波模様の胴板瓦の継目は、斜めにする事で目立たせないように作られていると教えてもらいました。

それから、波の瓦が気になり写真を撮りためています。その中からイチ押しの写真は波模様が賑やかなる順に並べてみました。最初は控えめな波模様ですが、写真2では立体的になって兎も登場し、写真3では棟の上で兎が楽しげに飛び跳ねています。継目に注目してみると、写真2は波や兎の足が継目に重なることで目立ちにくくなっています。写真3では波の模様に沿って大部分の継目が作られており、さらに目立ちにくくなっています。

写真2の製作年代は不明ですが、時代とともに装飾的になる傾向があることから1↓2↓3の順になりそうです。

ちなみに、この3枚の写真は泉州谷川（大阪府岬町）で作られた瓦です。生産地（製作者）や製作された時代によって、瓦の作り方や模様の表現の仕方などにどのような特徴があるのかを説明するため、カメラを片手に日々散策しています。

（松井 美香）



写真1 総持寺（和歌山市梶取）
宝暦11年（1761）



写真2 稱念寺（和歌山市加太）
年代不明



写真3 法福寺（阪南市鳥取）
明治11年（1878）

きのくに歴史小話

～きのくにれきしこぼなし～

埋蔵文化財課

所謂「太田城水攻め堤」について

令和2年2・3月、和歌山市の調査組織により、和歌山市出水に所在する所謂「太田城水攻め堤」の発掘調査が実施されました。その際、現地での見学もさせて頂きましたが、調査成果及び見解については、手順を踏んで公表されることとなります。

さて、今回の調査地（写真赤矢印の下）から北西側に残る高まりにかけては、「太田城水攻め堤跡」として和歌山県教育委員会が発行している『埋蔵文化財包蔵地所在地図』に掲載されているところになります。堤の所在する地名から、「出水堤」と称されることもあります。

以前から、今回の調査地の北西側に残る「高まり」＝「堤」そのものは、現状での基底幅35m（推定復元）・高さ5mからみて「堤」としての機能が十分にあるものと理解していました。そこで、ふと考えたことがあります。「堤」は堤として良いのですが、さて、「水攻め」するのに、どのようにして南西部に推定される「太田城」の周囲に水を引き込む事ができたのだろうか、と。また漠然と、堤の内側で「太田城」を籠城させるほどの水量を保つことができなのではないだろうか、と。

このような疑問の中で、平成20年に刊行された海津一朗編『中世終焉―秀吉の太田城水攻めを考える』和歌山大学フィールドミュージアム叢書①は、歴史学、考古学、河川工学、地理学、土質工学などの各界のエキスパートが結集して、多角的な視点から「太田城水攻め」の課題に迫った秀逸な良著となっています。

私は、土木工学は元より、歴史地理学においても門外漢です。この点に関しては、土木工学の専門家による堤の内側への導水シミュレーションについて述べられており、注目しています。

その後、地籍図を利用した太田城の位置の比定作業や太田城の成立過程の新見解が出されており、私の疑問の解決も間近と思われれます。（土井 孝之）



現存する太田城水攻め堤（南南東から）

催し物案内 和歌山県内の文化財関係イベント情報 (2020年春～2020年夏)

和歌山県立紀伊風土記の丘

- 春期企画展「埴輪と須恵器 ～きのくにの窯跡から見える古墳時代～」
2020年3月21日(土)～2020年5月10日(日)

和歌山県立博物館

- 特集展示「江戸時代の書」
2020年3月14日(土)～2020年4月19日(日)

和歌山市立博物館

- 特集展示「平成30年度寄贈資料展」
2020年3月14日(土)～2020年4月5日(日)

高野山霊宝館

- 春期平常展「密教の美術」
2020年1月18日(土)～2020年4月12日(日)
- 春期企画展「ほとけさまと動物たち」
2020年4月18日(土)～2020年7月5日(日)

新型コロナウイルス感染拡大防止のため、期間変更や中止となる可能性があります。
掲載内容から変更される可能性があります。詳細は各施設へお問い合わせください。



目次

- 1 表紙「大福院本堂竣工（上：正面外観、左：内部内外障境、右：虹梁・木鼻絵様）」
- 2 特集「景観重要建造物大福院本堂の保存修理－建物の復元考察とその過程について－」
- 6 埋蔵文化財課 短信「天路山城跡の発掘調査」
- 7 きのくに歴史小話「瓦のはなし④棟飾り－進化の過程－」
「所謂『太田城水攻め堤』について」
- 8 催し物案内

風車90 (2020・春号)

令和2年3月31日

(公財)和歌山県文化財センター

URL <http://www.wabunse.or.jp/>

(公財)和歌山県文化財センター

【事務局】

〒640-8301 和歌山市岩橋1263番地の1

TEL 073-472-3710

FAX 073-474-2270

kanri-2@wabunse.or.jp